

長谷川 忠蔵（はせがわ・ちゅうぞう）

1、プロフィール

言論人。大正8年南黒地方初の新聞「黒石時事」を、同15年には「黒石新報」を創刊。昭和6年からは日刊となり、文芸も積極的に掲載して好評を博した。

<生没>

1889(明治22)年7月5日～1950(昭和25)年4月2日

<代表作>

「黒石時事」、「黒石新報」を創刊。

<青森との関わり>

黒石市出身。川柳、都々逸などに、大いに才を発揮する。黒石時事社、黒石新報社を経営した。

2、作家解説

明治22年7月5日、黒石町上(かん)町長谷川菓子店(通称「美濃半」)の第七子として出生。姉のふは後の木造町長葛西末吉に、姉ふきは弘前市一戸彦三郎に、妹ときは木造町カネ又旅館にそれぞれ嫁いでいる。ふきは、詩人一戸謙三の母である。

黒石高等小学校から県立第四中学校に入学したが中退。六郷尋常小学校の代用教員や「陸奥日報」黒石支局記者をしながら、黒石、弘前、大鰐などで芝居を上演する。文芸、浪花節の修行の目的で上京。帰郷後は「浮雲会」、「黒石研謡会」に加わり、川柳(闇五郎と号した)、都々逸(箕八と号した)などで、大いに名を上げた。「世界一といはれる淋しさの大男」、川柳の代表作である。

大正8年に、南黒地方初の新聞である「黒石時事」を創刊し、タブロイド版の紙面に事件、ゴシップなど身近な社会現象を掲載した。この年、町政の実力者である西谷徳造の私生活を暴露した原稿が裁判沙汰となり、社長である長谷川は6か月の実刑、東京巢鴨刑務所に収監された。この事件により「黒石時事」は短命

に終ることになる。翌年出獄後、板留温泉で湯治をしながら、盛んに雑誌、「弘前新聞」などに川柳、都々逸、随筆（ペンネーム長谷川鶴）を発表する。

同 15 年に、「烏城乃魁」を引き継ぎ「黒石新報」を創刊。同紙は旬刊から昭和6年に日刊となり、文芸に加え花柳界のゴシップも積極的に掲載して好評を博した。また、労農運動家の闘士柴田久次郎は農村問題について言論を振るった。

黒石市黒森山浄仙寺「文学の森」に、長谷川の文学碑（同 40 年9月5日 除幕）がある。天内浪史、中村海六郎の追悼会（同 19 年9月5日）の日記の抜粋が刻印されており、右手の鏡石には経歴が刻まれ、「川柳、都々逸をよくし、黒石に始めて日刊黒石新報を発行して地方の文化運動を援く。寡欲恬淡にして、粹人の風格あり。」とある。

同 25 年4月2日、胃潰瘍により死去した。

3、資料紹介

○長谷川闇五郎文学碑 拓本（経歴部分）

書画

1965（昭和 40）年9月5日

380 mm × 535 mm

黒石市黒森山浄仙寺「文学の森」に、長谷川の文学碑（昭和 40 年9月5日除幕）がある。天内浪史、中村海六郎の追悼会（昭和 19 年9月5日）の日記の抜粋が刻印されており、右手の鏡石には経歴が刻まれ、「寡欲恬淡にして、粹人の風格あり。」とある。